枕草子抄

三

杉浦蔵書

梅乃くきうらくも
淡紅梅 薄紅梅と
紫いろにこきも
桜乃お花赤きもあり
萩の花しらいろ
伊勢桜よ花の色
ひとへ八重すみとぞる
こひかり
郭公のなきぬくらん
新古今 人丸のよる
あくこゑをえや八五段
わたくまず初卯花の
かげりくれて
おどろかるきされ
荊棘などの垣
あをいろのくずよしろき
ひくがきね などろの
垣乃まさきに卯の花の白
きらとくし おそき
さえ麹塵しかりやまとと
いうさきしおくとさらす

本乃つぎ

梅乃こくもうちくもこうそい桜乃花びらかおおきくり紫いろこきが枝おろくてゆきる 萩乃花しろひあざくもよくさきるいとめでくし うれ花ハしるきにありてあらしあれどげくしの（梅桜萩の中し位よりくるとし）わくう郭公乃ないりうくあらんとみつよいておりしより乃かへさまよせ（実按ぞ奥よ車よ卯の花をわの）さきのわるろちよきあやの家ども（さまさすずあり 卯木植の垣之）おどろあるかきねなどよいとしろう咲しるこそおりくれ。おそいろのくよしろきひとくがきなみぎくる。まくらち

九曜文庫

あるく一条禅閤の説をも
あはせくらべてみるべし　青朽葉とて表青裏丹
乃足をひきはへたるやうなるをいふにや
さ桃花蕚集にあり
橘乃ころ〳〵あかきをいふ
楚辞橘頌ニ　楚辞橘頌
頌ニ緑葉素栄
これこがねの玉かとみえて
橘ハ花さへ実さへとて
ある橘也　朗詠盧橘詩
枝繋金鈴春雨後
花薫紫麝凱風程
これ橘の花のかをりの也
ありしつぼねてかく
そも春雨後の心也
ことによむべきにもあらず
橘に実のなりたるをいふ
かゝるさまにをかしきを
梨の花世にすさまじく
梨花は唐には賞すれど我
朝には梅桜をまさりとす

ぞなどかはいとをかし　四月の
はつごもり五月のついたちの比ほひ
橘乃葉のこく青きに花のいとしろく咲
たるが雨のうちふりたるつとめてなどは世に
なく心あるさまにをかし　花の中より
こがねの玉かとみえていみじく
きはやかにみえたるなど朝露に
ぬれたる桜にもおとらず　郭公の
よすがとさへ思へばにや猶さらに
いふべうもあらず　梨の花よにすさまじく
あやしき物にして目にちかくはかなき
文つけなどだにせず　あいぎやうおくれ

そのおもひねびけて詩
などにも作らるれば
よつけてなどやせぬと
いふなるや
やさしひたきの濃艶ひ
ありあひけるなるか
これは長恨歌にある事
なるに楊貴妃すで
に馬嵬のちりと成て
玄宗皇帝猶ふかく懐
おもひて臨邛の道士を
仕にして魂魄を
求めさせ玉ふに蓬莱にあり
ありて貴妃よろこびあひ
て帝の消息を伝ふ
貴妃涙をこぼせしかた
玉容寂寞涙闌干梨
花一枝春帯雨と白
楽天の作りし事也
桐の花むらさき　良

たる人の顔などを見ては　たとひにいふも
げにその色よりしてあいなく見ゆる
をもろこしにはかぎりなき物にて　詩
にも作る　なほさりともやうあらむと
せめて見れば花びらのはしに
をかしきにほひこそ心もとなく
つきためれ　楊貴妃の帝の御
つかひにあひてなきける顔
ににせて　梨花一枝春雨
をおびたりなどいひたるは　おぼろけ
ならじと思ふに猶いみじうめでた
きことはたぐひあらじとおぼえたり
桐の花むらさきにさきたるは

文集ニ云、晉桐花詩ニ
花紫葉青々タリ
ところにこそしき
名つきたる　鳳凰也
格物論ニ云、鳳ハ瑞鳥、麟前鴻後
蛇頸燕頷亀背魚尾
平之世則見其形鶏頭
五彩色高六尺許、非梧
桐不棲、非竹實不食ト云
まして琴につくりて
毛詩ニ云、椅桐梓漆爰
伐琴瑟　　文選十八巻
叔夜琴賦ニ云、惟椅桐之
所生兮託峻嶽之崇
岡、蓋人攝以剸為雅
琴ヲ中略記之
かれる声に
いとあはれなるや　花のころ
五月のさ月を
拾芥ニ云、證類本草ニ云
吾ニ以俗人取樗葉佩之避悪氣ヲ
おり

かりきいと紫乃はなさり。るゐこそあれ
ども又ことさらもとひろうはめでたきより
わくずところにことく　しきさ名は
きこゆる鳳凰これのみとすむんぞこと
ありがたくてことりはそうくさるく
あるね乃出る声で枕しとそよのつは
いふべくやそあるにこうこそうへめでさ
なれ　木乃さるがおくけられどお
ちり花にとかりかれだるよさることに
さきそりうちど五月の月をあさを
今と日今ハ端午ニ花ぞんを於びかざする也

おつまとの池　勝間田
或勝股　八雲ハ八下經
とあり、範兼卿乃說ニ新
枕皆同お　汲輪ハ義
沙とよみ了　顯昭法師
ハ大和ニ　　余池
それ乃いけ
八雲ハ大和とあり
みとの乃いけ八雲ニ
やまとにあり
むけれなるくかいきこく
おくばそう　一夜ゆき
あるしこころあるもの
池とも名づくべれ
とのとし

池を
かはすこの池　いまれ乃いけ　小名の
池を聞せまほりしにもあれ隙なく
さらにまつしいとれりしくえにし也
みなしのいけおやまろあとては当
なるなんとりひしのぶ五月あとずべで
あはれいんとする年ハさいはまる
このま猶なてまんあるる又月乃はくく照
どう八雲乃さきぬままなんねりく出る
とひきりおげりなくかきそあり
ごろさもはけめいづるかりをあるなる
遂まぢりつけなるくるとりへまりし

ちねめ乃男をかけ
拾遺集ニ云猿沢乃池に
采女乃身をなげたるを
見て　人丸「わぎもこ
がねくたれ髪をさるさハ　又
乃池の玉もと見るぞ悲しき
悲しき　拾遺抄ニ云人丸
がかの帝此猿沢の
池に行幸ありしに
采女乃身なげたるを
御らんじて人々に歌よませ
給ひしときよみ侍りて
よめるとかゝれたり又これ
只勢のよぶんにや
ての事　新古集ニ童蒙抄
ニ采女の事大和物語ニ
ともかく帝の寵をうけたりしが
ほどなくかれけれ
まへにの池
こゝろとやこそ
さるをいかなる
よねらうかけもすね
やかまめうや

おもし　さるさハ乃池うねめ乃身をなげ
たるときこしめして　みゆき　おぼしめしたる
こと乃かなしさにて　こゝろあはれみたまひ
人丸がよみたりける歌　ねくたれ髪を　みゝ
まくも　ゆかりしや　もろともに
ながらへしも　さやかなる池こそ
とはなれかりけれ　かゆゝかなる
こひねがへる池　ちゝ乃にけ　ゝみをとゝる
かりそめのひとゝもなかりし　ますみの池
こひすてられてぬる　八雲抄
内侍乃このむらさきの　八雲大和にに
古今　河野之こゝろはかなき池
　いにしへ八雲にも見えたり　思ひきりて
河海云　風俗上野国　さしかへりてみける原の池のいさ
　　　かくて藤
せちゑ

せちゑ　節会なるべし
五月ニ行なはるゝ
花鳥餘情ニ云五月五日の
乃節ハ天皇あやめの
かつらをかけさせ給ふ武徳殿
ニおはしまして騎射あり内外の
人々みな是を見る内侍の
官内省菖蒲を献る
内侍女藏人續命縷を
群臣にたまふ又諸衛の
ありて六府騎射のこと
あり　延喜式太政官
云凡五月五日天皇觀
騎射幷走馬其及史
等撿校諸事所司
各設御座於武徳殿
是日内外群臣皆着
菖蒲鬘
續命縷延喜式藥玉也
めひかのらの此くものを

さつき
五月ニ志くハ　あやめぶくとかきそふるの
かつらおひもゝこゝろにかなふさまのゝ
乃肉をそゞのほりて　騎射をさしつる
かまでいふそ　わがきみにゝきゞにかけんと
やきさわりてある　菖蒲の節会
　　殺ぞる哉とめでゝかう
こと物わかれてさりし　ぞう乃たきき
乃人々かわりかたりてゆかしき　ゆきて乃えや
あでゆかぬひどのかわ　御ゆるさぞらむ
ものゝ乃恨をもみさげて　まつせ
世がこちやうそつゝるなや乃たね
乃たもりはまうち九月九日の菊
をあやとすし乃きぬまつ　ゆて

皇后宮定子の御こと
御几帳
身屋　延喜式
あかつき

五月のみくすだまハ糸
平よりまゐらする延喜式
御記曰く五月五日糸所薬玉を
すゝめちる縫殿乃別所と云
ゆへに此薬玉を糸所とも
いふよし江次第にみゆ
江次第ニ薬玉頭云縫殿別所
在采女町北縫殿別所
也五月五日献薬玉是也
拾芥同 河海曰御記曰
延喜十三年五月五日丙午
絲所供奉薬玉如常
撤去年九月茱萸以
薬玉懸母屋柱
前例也雲図抄同
むすびつけたる
まどらにかけて採を
唐衣汗袗にかけたりし
毎年のあやめを出し
けふのこともうち採も
毎年のそれもあめとも

まちせらるわがよハふゆのひつきて。
月比あるくすだまくりすゆめる。
みくすだまハ菖蒲かりすゝぐあるべきまゝや
あらん。されどそれもうるはしきをえらびとり
て。杣ゆひあぐるしるしたげとあり。御
せうまつりけらき人とハちうふみさうし
けしきのいつけずしらくさあぐ
きこねがさくあがさね。おりしきかりえざ
ども。むすび乃それくもあらびつけるど
きつるめでしうふべき本ちさね。ど
いとかし。さて其うふけしとく採
をよろうかずへやそれあはぢあは

くすだまをつけたる柱をいふ
菖をつけて茱萸をすてる
茱萸も菊も九月にかけて五月にとる
刺採ト菖蒲をかさ
御帳
五月乃節供に陪従まで進らせし
女の腰にも
ねさし
作花し茱萸
菖蒲の根と
村濃の組糸し
毎年のそれにて
いまそとも可用
大かたそれなる也
十ッ字 組

ゆくきわさしてかと
茱萸をとらくよろ
こひ給ふ也
法ねどもとも
我袖のうらになを
つまを
をもしゐるさるゝ
むしたきのなうふかち
さうちもきのるとよ
舞でさるなれそう
つくて又白き紙を
あやめのわかやう
せし
又乃神にいれあらし
人わか乃文に菖蒲の
根をいれてともにそろ
まゐりすせんと侍る
乃は合とるさなし
人乃むすびとめやんごとなき

くわうべ乃おどくふはけていふごとき
わざしてまとまとまさらむ人
ひえてべえもしらずけうおりとせひ
まさぎかぐきるこどわりわハあまがう
ひきとられてあるとも押しむすびたき乃
かみあわむち乃花。あるときさるよさるぶ
乃さかふ。かつらすきそてひきゆひ又白き
紙をねよせてゆひさらりいとあつき
ねすで文乃あうりいれまざるる人どち
あどもつとえんあるちかりあらんとつひ
あひせりてふ。むちハえせはらせちどする
れうし人乃むすびとめやんごとなきあでよ

ざれむすびなきむすび
小舎人童
女房
同志し
結むすびやかなるやさし也
まゆみの花くみあはせてむすび

みくり　人のむすめをよく〳〵み
てとやごとなきれうさ
あづまもどやりま人
を撫まよいうり
なまめかしく見ゆるなり

かつら　楓　旧事本紀
桂　日本紀　かつらの字
あつひさまは添る樹也
かき　仁柳とあり
柹　字彙　柹乃字柳乃
字より考へるゆへ
まやぶれかきとよん
うえれ木　曽波木と
延喜式大全に登るゝ
そしる木きころもんども
曽波木のすとゆう所
木立ハそうきのゆの
ぐらの葉花おなかの
めづらしきとし
やどり木　宿木　寄生　ヤドリギ
三に院法従二寄乃一字

清文きこしかたの人とぞふハ心こそゆかしきなめ
めりかほりきしたぐれの花かかよ鄙土の（子叔ハ我名をあかしゆかれいかのりと云よし）
名のりたてもすべておかしかし

木名

かつらごえふかき（又栄花）いちぐるうえれ木（イ柹）
もしさびきこちすれどもふたの木とも
ちるもえてどふべきるみどりなり
まる中に時ともわかずときてそぎもれ
清やめきてなかひうけぬあなぐめ
中よりいて出るめづらし　まゆみ　檀し
さしゆかもいとさずえよのなまもかれ
どやりまとりし名ことあられあし

きもやりまといひて・
こしのきにすむかるを
花もなきハ本見寒藪と
み桶し葉寄生のすよと
さかき　河海云　榊とハ
真賢木　真坂樹　日本紀
こかくり天照太神ての
岩戸しとぢこもりし時
八百万乃神達天香山
の坂樹をねこしにして
すまつりし神乃
銘木とす。榊ハ本字未
あすずの花字と
賢木　服木さかき
晩時乃まつり　賀茂の
晩時の祭ハ十一月。八幡
の晩時の祭ハ二月し奥ニ
所　神楽の花ら　豪
内侍所の御神楽ハ人
長梛をとりてかなづる
事あり。探梅の事も
句源氏ふきおり
ちらふわれて　六帖

さかき　晩時乃まつりに御神楽乃ゆうべすぎ
てとかなふよふ木どもこそほれ神乃庭
生へ　あり神とひそぶめるんとどりそき
かり　むとの木ハいぶちかゝる雨まで
もこゝふまずらひさくしず。むどろく
さきなむひやかなどうとりまきそ。ち
えりわかれくこひする人のさめまよ
いそれうるぶ。されかそかずを走りてひ
まづめるんとおりかりかり　ひの木
人ちりかり来　擣されど。ここにぞよ同ぞ
乃さればくうもおりし。五月よ白乃
こゝまもふずらんとおりし　かえでの木

一説 いづみなるしのだの森(モリ)乃楠(クス)の木の千枝(エ)にわかれて物をこそ思へ 此歌によりて也
古今序 此殿はむべもとみけりさき草の三つば四つばに殿づくりせり 小島釈房抄云 幸種(サキクサ)ハ檜(ヒ)の木をいふ。三つばよつばとハ三棟四棟と云屋の棟(ムネ)をいふと也
あすはひの木 明日檜(アスヒノキ)木とや世俗にいふ。されば此木ハ檜の木に似て枝葉すこし細き也
これは今の[illegible] このめハ細葉なるもす也 おとどハ前にあげたる(?)
ねずもちの木 楝 和名

ほそやかなるにもえ出でたるこずゑの 細々許
あかみて、おなじかたにひろごりたるは
れ葉のさま、花もいとものはかなげに 楓の花卯月の比さく也
て、むしなどのかれたるやうにをかし
あすはひの木、此世ちかくもみえきこ
えず。みたけにまうでゝかへりたる人など 吉野乃金峯山をいふ
のもてくめる、えださしなどは 此木を家づとにする也
いとてふれにくげにあらくましけれど
何の心ありてあすはひの木とつけ
けん。あぢきなきかねごとなりや。たれ
にたのめたるにかと思ふにきかまほしく
をかし。ねずもちの木

やまなしの木 河海ニ 世乃中をうしといひてもいづちか身をばかくさん山なしの花
イ本ニ山たちばな 古今 我こひを忍びかねてはあし引の山橘の色に出ぬべし 蒙雅抄云 山橘ハ世俗ニ藪柑子(ヤブカウジ)と[illegible]
[illegible]
椎乃木をしもとり[illegible] いはるゝなるべし 深山の椎柴[illegible]
百首ニ 仲實[illegible]
三位二位乃うへのきぬ 二位三位乃袍ハ紫也 白樫にて染るや。延喜式第十四雑染 色式によるべし

人なみ〳〵なるべきにもあらねど
葉のいみじうこまかにちいさきがをかしき
なり。あふちの木 やまたち花 やまなしの木 椎 イやまたちばな 山梨の木
の木、ときはぎはいづれもあるを、それしも
葉がへせぬためしにいはれたるもを
かし。しらかしといふものは、まいてみ 人気遠き也
山木のなかにもいとけ遠くて、三位二位の
うへのきぬ染むるをりばかりこそ、葉をだに 白樫にて染る[illegible]
人の見るめれ。めでたき事をかしき
事にとりいづべくもあらねど、いづくと
もなく雪のふりおけるにみまがへられて、す
さのをのみことのいづものくにゝおはし 素戔鳥尊ハ天照大神の御弟と古今序にあり 出雲大社とおなじ

考。但ほか納言のいへにさ
とわるくしば此乃記には
かくのごとく深き此事の
由也。但かくのとへいさして
みく楪もかなわれ近ころ
故実乃女ユありしくて下
を藤芳などよく節で
深くてうへを五倍子乃枝
あるなやををみへて深
るがゆゑもよくくてさう
ぬくそつら。又倍子乃木
なるれば松楊乃皮よ
ても深るらし。桃華藥
葉ありとてかり
出雲の国の神より始る伝
ることなりひとて人丸が
いに伝ありて人丸もと
ありける不雷也
拾遺ニ人丸 足ひきの
山路も志らず白樫の枝
もとをゝも雪のふれ
ればいかゞ

ゆる時にもろこしにおもひくく人丸がよみ
ける哥にすぐとみるつくしのおもかげや
いかなるかたちをしてもはかなくとも（世に伝ふ事ども此方の事にうけてなしさ）
かしあはれとも おりしもきてやどりつる
梅の花ともとも見るもしものいろ
こそあかりしね。ゆづりも乃にほふさ（楪也 弓弦なりともいふ）
やかりはやめきてるいろもあれき
よげなるみ。なもひろげずみるべくも
おもず。くきおかうきてしとうえ
えさるところいやしそれどもおかしれ。
まべての月ごろは霧をも見てしね梅乃
さかすのはどちらかとときさめきて

志らすれ雨ふりしと時め
きてあき人の
十二月乃晦日には盆祭
御霊をまつりなどに楪
をもひ柚よりてらすも
報恩経云十二月晦日午
時来正月一月卯時帰
これ身まも御霊乃来
る月あり後經り番
よりひのはるてこそめ
花あるに 歯固ハ歯を
よわひ。則よわひをもよ
めり。歯固ハよはひとか
いふもやし。河海云内膳
司青瑣門供御歯固具
盛瓷大根一坏瓜串刺
二坏押鮎一坏煮鮎一坏
猪宍以雉代之鹿宍以鴨代之以上七坏之内。精進物供於第一御臺魚類供第二御臺或
説無鹿宍有腹赤　とく
ともちぢせんよやと　いよもえる代餅が云うりゆづりなれをなつかしく
ゆづりの神れ　後撰「梅本」様人ありかなかれ代のゆづりのみなせんせや見をこそ
あきるよけ哥大ハ延喜よもありなかりの作ハ河海云樹神也是後ちなゆその神

あき人の名ひ始めも志てみやとあ
ままなるりし文よりものぶるちがさめ乃
ぞうのを志てはつひさめるハいづる
みのるみなぞせん世やといひさるもいと
一かいもおいともしてそとりの神
のすすんともかこし。御来乃すけ
うち（射之）なるをいふんもちかし。すまき
あるれどすゑ乃木がしめきてある
き家乃ことのこし見てしさと

もとちかうなれども只柏木とのみ云も仁式に總柏のあまりにあつへし雉
歟古人餘のまゝり詠之如何
なの佐ぶらうと　八雲御抄に楽府を柏木といへり。[illegible]
ある時柏木乃森也とよし[illegible]。童蒙抄にも楽府を柏木といへり
すべてなれども[illegible]　樱梠を枝とす[illegible]。朗詠云栟梠
葉戦水風涼し。西湖乃暁[illegible]孤山[illegible]

あるも

こゝろ乃梢られどおもむいとあはれ也
山海経云黄山有鳥其状如鴞青羽赤喙人舌能言名鸚䳇也　文選鸚䳇賦云惟西域之靈鳥挺自然之奇姿體金精之妙質含火德之明暉性辨慧能言

人乃子のゆくへしらずかなしんよ　郭公
くゐのきゞす みどり ひな 雛 ひばり 火焼
山どりも友をこひしなくにこゑを
てんせられぞあはれなりけんいとあはれ
あり谷へづてきるれどあはれところ
ぐす　つるそ[illegible]されども
あくこゑ雲[illegible]ゆんにとめて

[illegible]西域の[illegible]
山やはべり[illegible]人に[illegible]
[illegible]

うしかしらあをきすずめ　いろかな
どり　ことゞり　巧鳥也 巧婦鳥とも 女匠[illegible]　ほぎさいとみえるめを
みそさゞい[illegible]ぬるよりもとゞちよろ
[illegible]
ひとかはれじと[illegible]
それ

かとけるを[illegible]
[illegible]
山鳥ハ友をこひて
これハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
陳[illegible]帝[illegible]
[illegible]
[illegible]

谷つゞきて[illegible]
[illegible]童蒙抄にも[illegible]山鳥の尾の[illegible]
[illegible]古人[illegible]
て[illegible]雉[illegible]
[illegible]　圓According[illegible]
[illegible]　斑鳩雉也　鶬　和名集云　鶬似鶴而白喙者也
霜衣雪髪[illegible]紫[illegible]詩[illegible]白
鷺[illegible]山谷演雅乃詩[illegible]

なぐ心乃はさらにめづらしきがむらがりや
ゆるぎの森うひとりハれじ　万木森　近江にし　格物論ニ云鷺ハ林ニ棲朝ニ出テ捕ニ
魚鮮而食夜帰宿其處百千為群　ゆゑうゑや　ゆるぎの森の鷺なすらと独そ
ねどゆうの独ぞ鳴　鴛
そことり　ありハをしいとあはれなり
或説ニそれをやさしくさゝう
故鴛鴦ともいひけり
只白きはさぎとはいふ定
家卿もこれをうたによめり
そらしてよべし
それのうへのあはれを
六帖に見えたる乃霜
うちはらふ友をまちてよの
独ねするがわびしき
おまどりもとこそ
拾遺集に見えたるハ佐保の
川ぎれ川霧ハおもしろし
せるくいもうもえらまた
かをしハるねのおもひつるに
後撰集に見えたる池乃鴨
のうへにそふ霜のおもき
て秋のよのもつらくも
そのうへはうちょなつかしき

かづ衾にわかれうへ乃
かへりぬるうくはあねれなり
霜をそふらんおどいとをしもや　都なる
こじり川ちどりそ友やよびすらん　伊勢物語に
こう　かるも、こ鴨ハとやくさらに
あおるれなり　かもハそねの霜を
そらのかんとおもふかなし　詩
おもしいなでうきかりはなり。　鳶
よわそめてさ田りするをはつかあ
てうりうつてきれどもへへいての乃　貴子けるきたも

そ清かの中はあ所し
特なと自化あがり
あるべし必内裏よあ
り出つハ、あらず。朗詠ニ
宮鶯囀曉天ニ　とつらふよ
て西樓ノ月落ル花ノ間ノ曲
中殿ニ灯殘ル竹ノ裏ノ音と
菅三品作り給へり。拾
遺集ニハ醍醐乃帝の
にあの御あらよ鶯の
なきたるを松のうへよ
り鶯の音をとらう給ね
乃月とハつかへかされ
とよみてるもおもへとや
さるハ竹もちなく
禁秘抄云中殿東庭ノ
竹ノ臺ニツと彼中殿ノ灯
殘ル竹ノ裏ノ音とよめるをこ
中殿ハ清涼殿なり
こうもつもとく
禁秘抄云天徳ノ年十

うちにあらぬかいとわろきぐくへ乃さえずん　内裏より鶯おさ
おもきいひしらぬもおもしとせひし
てりゃとせぞりけかひてきてしま　清かの中ならかひし
まさにさのよをもせぞわきぎさ
あそ竹もちくこうだいもいとよく　五奏
かよのひぬきさうわなりしつ　鶯の来りよしもおもとし
てゆけどあやもきいへ乃んところ　退出
もあきさ梅あぐいるやうふの鳴
おるあいねもつぎてもあさこちす　寝ごきとふ
まづも、ゆまし、かせん。夜秋の来むで　天性
あひごゑりなきそてぱしくふあり　老聲
をもわくをのえ名をつけられてくるは　下賤の者

二月十八日栽紅梅於中殿東廂仁寿殿梅壺ニ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月物語

細流に蚊遊

とあり。余雅に螺螄泥鰌也。蛭蜣身狹而長。有角黄黒色。生糞土中。角下有翅。能飛。朝生夕死。愚案ひをむしはげろふ

月物語や。童蒙抄

げろふ。ちいさきやうなる物。八月ばかりよりいでゝ。八月ばかりまであり。ひるしぬるつき出

月晩朔

風乃をとあてゝ。ちりく八月ばかりよりいでゝ。ぞちよ。とそのあげろふ。くあつれたり。そへこうみつきあるもの。ちりはいれば。あいぎやう

蠅

きあるどもの。ちりはいれば。あいぎやう

蠅

ちりはいれば。あいぎやう

蠅

ちりはいれば。あいぎやう

蠅

あけぼのゝ
ほのぼのとしらけわたるやまぎわ
すこしあかみたる雲の
ほそくたなびきたる

夏は夜
月のころはさらなり
やみもなほほたるの
あまたとびちがひ
また
ただひとつふたつ
ほのかにかすめる
あめもをかし

秋は夕ぐれ
夕日のさしてやまの
はいとちかくなりたる
からすの
ねどころへとまるとて
三つ四つ二つ
三つ四つ
二つ三つ
とびいそぐさへ
あはれなり
まして
雁などの
つらねたるが
いとちさくみえわたるは
いとをかし
日のいりはて
風の音
むしの
なくこえ
まいて

冬は
つとめて
雪のふりたる
はいとをかし
霜
いとしろく
おきたるも
またいとつきづきし
ひるになりて
ぬるくもゆるびもて
いけばすみがちになり
わろし

ひるねもしたるこそなにもなけれ

みぐるしきもの
みぐるしきもの
かみあらきにんにんの白きあやのきぬきて
ものいとうつくしうけづりなしたる
もののひつぎ
あをきもの
をとこもをんなも
ものをいとあらきかみにかきたる
げすの家
雨の降りたる又ふれさへふる
ものいとにくし
月のいとあかきに
やうやうあがりくるほどに
ものをいとあらきかみにかきたる
あめもうどのけしき
ものをいとあらきかみにかきたる
ものいとにくし
ものをいとあらきかみにかきたる
ものいとにくし
ものをいとあらきかみにかきたる
ものいとにくし

六位義人うの判官

六位義人とい歌夏の判官

六位義人を兼

六位義人を乃ぜ

六位義人を

六位義人を

六位義人を

武士乃人氏洞或
八薙刀乃ゑちくを
けきざしやさーうて
やさーき氣ゑうち
ゑちぐーてぱちぐど
とうひく動ゑうち
むるぐゑ　人との軍
せ月ゑうこ乗車して
一月足ゑくくくくゑ
むちき車八代をすく
拾遺集地名よむ軍
ゑ剣乃ゑちくゑち
はちぎ大のゑられて
ゑづゑちゑ
ゑてゑうび　うつゑ
やーゑゑ
ゑちわぼくさ　佐殿の
掃除さーゑづーちの役
する如ゑさ　おこ江ぱ禁秘
おりこ江ぱ敷日ゑ親族
やぱ公入内可祈祷ゑ殘

鉾　剱

ゑちぐゑてあるくくをぐぐと
ゑちぱいゑくはげどのとつひくち
いとちーぱけきざみやさーグてちゑ
ずもつひきくといれでいぬるゑのいゑみ
ぎゑゑ　人ゑ　月ゑりもるゑ
ゑくゑ　きけゑ　ゑるかくこれゑけ
ゑるきくくゑ　ゑちぐ
ゑてゑうび
ゑちぐ　ひげぐちよゑゑぐ
ゑるゑ　ひゑ人の乃ゑ
ゑてゑうび
ゑちぐ
ゑちわぼくさこゑうゑをゑちくきゑの八
ゑちぐ
ゑれぱ下女乃きりちぐゑわ潜ゑきゑ
ゑちぐ
ゑきゑ人ゑ
ゑりせきをゑちきゑわざぱぱゑ

ゑちく　玄音八女孀ゑ
ゑちくちくちくくくく

五節

職御曹司　中宮職

大弁

大弁

わらはきたなくこはいひつくろひ
なさけなきものをいとはしがる
みくしげ殿

万事あるべきことなれども、
思ふ心をとどめがたく、
よきもあしきもたのもしげ
なるのみにあらず、
きとく九条殿遺誡に
隨有用之力求義麗
とこそ侍ハ衣冠を車の
うへにおくべし遺誡に
ものいはざるこそ
ものいはれたるなれ
彼論語に過則勿憚改
とこそ侍ハ
うかやのわらこそ
さあらんハ之ぞ
ちかき世の人の
いとみじげなるふるまひ
のまひしはべりしに
げうゝハべりしものの
いとよろしからぬ
ぶるまひとぞ
ゝハべりける

みの人ゝ
あるべきことなれども
ほかの人の
はべりてもぐ
わるとなり
あるべきことなれ
いとみじげなるふるまひ
のくづるゝ
いとよろしからぬ
ぶるまひ
とのゝ
とゝ
ぶるまひ
ぶるまひ
ぶるまひ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

細ものもまぜ四腹五ぜんと
ゆのぶたをのかうこせし
ケ
御厨子所御膳棚・板
敷の裏庭まわり給
餐給々の内腹ちぐを
侍ぞ〻ぞ四位の殿上人
別當ゆ、長ゆ大納言位
を頭とし拾遊ぞ
九河内殿垣を花乃内
厨子所の殿ぞ〻ぞ家
集ぞ〻ぞ
皆ぞ〻ぞ
楚忽ぞ〻ぞ腹棚ぞ
ぞ〻ぞ
皆ぞ〻ぞ棚けぐれぞ
ぞ〻ぞ棚ひ離わぐぐぞ
別面殿ぞ〻ぞの者
ぞ〻ぞ
ぞ〻ぞ
ぞ〻ぞ
ぞ〻ぞ

方弘の殿を
ぞ〻ぞ
ぞ〻ぞ
ぞ〻ぞ
ぞ〻ぞ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

端蘋芳下篠

壺胡蘆 平胡籙

厨女

裝束

音無川 山城の国

大原にあり

布留滝

紀伊国

轟滝 奥州

大和

大和

泉川 大和也

泉州神天宮の官軍更

那賀郡山をさけて進し

湯殿河よりおして宝恒安

彦河を挽て

各枕詞

泉川と云ハ訛也 委貢本紀

濃の国 深度息案抄に見

泉川

音無河 紀伊国牟婁郡

伊勢

貫川

貫川

ひいてるあづま　ふのわたり　末野
川　あさり
川もいうるあるの名をとわるあるのときるま
川　雲漢詩竹木女雅　あのれ川　この志ある
あるあり　七夕ばかりやとりんをきてあり
ひいがよみをんをきてあり

あさむ川の橋　佐渡　長谷橋　末野
あづまの橋　あまびと
乃橋　あづまの橋　末野
舟橋　上野　佐渡の寄絃の橋　八雲抄
とづるぎれあり

をづまの橋　小川橋　彩橋　名所集小陸奥にあり
八雲抄　拾遺集　近江　世　乃橋　未詳
乃橋　かけあり　未詳
ちりはの乃橋　かちぎれあり
あひの乃橋　八雲抄　をのうきあり　やま
すが乃橋　名をきくる河　うあの橋
里　八雲抄　まづめのさと　いさめの里　未詳
人ぼ　八雲抄　乃さと　信濃　あさ風の里
夕月　丹後　里　とをちのさと　伏見里
まづめの里　つまとり乃里　人まとれ
いづれを　井手　拾遺　郡　人　ばかりん　我　やあん
あづまの　八雲抄　拾遺　郡　人　ばかりん　我　やあん

さうふ　萬苣
こと　薄　童蒙抄　菰　蒙

草八

さうぶ　ことも　あやめ　ひとおり　みぶ乃ゆり
神代より　ながくけるなり　ことあり　ろんじ
ぎふめでぐさ　二月　ながてやきもの　ものれと
ぐろと名乃おりきやぐあうきさ　ものと
ぐろ　澤深也
心あるわ　さろんと　ものも
面高とも　故心あるわ　さろん
とも　ものれて　名　白さく
也　曲禮曰凡視上於面則教
証　民同上於面者其氣驕
知其不能以下人矣
ろろう　八代ふ　實九里　ろ
和名云三稜草　ろろう
ろぶ　源氏　ものも　ものに
ものぐ　ものも　河海
和蛇　葛の葉　ものも　ものに
あるよ　ものぬれいのもの
あるぶとよろ　苦冊と
ものろ　ものの　ものの

草　蛇床子　延喜式　廿日
ぐ　ろ　ろろう　ひるも　ろ　ろけ
ぐふ　雪　酢漿　和名抄　ものの
ものも　ものを　芽　ものぐ　ものの
ものも　ものに　ものの　ものは　ものう　あや
ものも　ものに　ものの　ものろ　ものん　ものぶ
ものう　芽　ものは　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの　ものの　ものの　ものの
ものの　ものの　ものの

別ふなり芝ふ草あれ
ふるくさ
杜子美詩 默漢荷葉疊青錢
千本蓮八方の蓮ちりと果すれ
ぬ花ぬ佛ふ
ふすにつ
て往生極楽の
ぶよ
池
紅
詩
やまけ
普通ノ山ナ
童蕨
麦門冬
八重葉
山蘭
葛
葦
古万葉集 万葉集
清輔袋双紙ニ此集未代之人称古万葉集源順
集
古今
撰

集ノ中ニ云本アリ是有新撰万葉集若菅家万葉集等之故
新撰万葉集八延喜御時抄出之五巻也又云万葉撰者或称橘大臣諸或称家持
古今 山ノ八本ニ中ノ貞應ヲ二条家ハ用ル延喜ノ法ハ貫之ノ
撰 天暦五年十月梨壺ノ人撰之
ノ本ニ定家ノ貞應二年ノ本天福二年ノ本ヲ
袋双紙云鳴守遠高云古今後撰
而拾遺出来之後 万葉集用拾遺
陸奥ノ
紙
梨
東
蓮
蔣
桔梗

菊乃あそうつろひ
古今集秋下　平貞文
秋をへてきて時しるかれ
菊花うつろひにけるか
やどのかれは
ふんこう　玄賓僧正　古今の
物名　なにはがた　ちくさ
こんとよりて　基俊の
歌員　ふんこうの花
を見るにさ行乃紙
よむこゝろハこゝろとろ乃
と読侍寄　うつろ
ふ乃花　すゝろ
山茶花　二度の事
とかよりいとり　毋と度
末紅　ちりぬ
ぬ乃花　古今の物名
ゆふ　雁来紅　やう
ぐひ　菊　ゆ
ゆ　位異本
ひの花とあり　そ屋縁
ゆふで　別の物や
ちりぬ乃ふる　花とと家
ちこでまゝ　ゆ

かつ遣
かつらや
ふんぐう　我ぎぎも　ひろうげられど
うつろ花　けるかれて　ちくさ
ゆふ　あひて　ちくさ
わぶ　ちくさ　人やすべきもあ
ぬる　ぬれど　ゆふの花ちらふ
名ぐう　そげふる　乃ちくさ
をぶ　かきつ　ひ乃花　ふこう
ちれど　花乃花　いとよく　ゆく
秋とち　ちりけう　つれざれ
ゆふで　やう乃物ぐう　ちりていけば
ふる　ほけひる　夕ぐれあ

拾遺　物名　ちくさ
花ぐ　ぬれ　我
ゆ　久　来れ　あや
ちくさ　ふれ　ゆ
夕れ乃　実ハ　ゆ
ひさ　ちり　ゆ
ふぐ　ちり　ひさ
いで　ちり　ハみ
ちりぬ　ぐく
乃て　ちく
御幣　世芦乃　ゆ
佐際　ゆ　れば
本語　可動
ぐも　ちく
みゆ　芦　花
ちく　ゆ　本
ちす　ゆ　苗
ゆ　ちく
ちく
乃ち　れす　ゆ
ゆの　蘇芽　佐
ちく　ゆ　ちく

拾遺　物名　ちくさ
花ぐ　ぬれ　我
ゆ　久　来れ　あや
ちくさ　ふれ　ゆ
夕れ乃　実ハ　ゆ
ひさ　ちり　ゆ
ふぐ　ちり　ひさ
いで　ちり　ハみ
ちりぬ　ぐく
乃て　ちく
御幣　世芦乃　ゆ
佐際　ゆ　れば
本語　可動
ぐも　ちく
みゆ　芦　花
ちく　ゆ　本
ちす　ゆ　苗
ゆ　ちく
ちく
乃ち　れす　ゆ
ゆの　蘇芽　佐
ちく　ゆ　ちく

かつ　ひつ　ゆ　ひつ　ゆ
きの　ふる　ふる　ふる　ふる
ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
ふる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八重用

[illegible]

十二年の山ごとりのかしの
[illegible]

拾遺集十詞ちよ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春曙抄三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

7